



JAPAN PRIZE

2009年(第25回)日本国際賞は 『成長の限界』を著わしたメドウズ博士と 『核医学的断層画像の父』クール博士の 米国人2氏に決定

「自然と共生する持続可能な技術社会形成」分野

「医学・工学の融合における疾患への技術の展開」分野



デニス・メドウズ博士



デビット・クール博士

財団法人国際科学技術財団は科学と技術の進歩と人類の平和と繁栄への貢献を称える日本国際賞(Japan Prize)をニューハンプシャー大学システム政策学名誉教授デニス・メドウズ博士(66歳)とミシガン大学医学部放射線医学教授デビット・クール博士(79歳)の米国人2氏に贈ることを決定しました。

2009年の日本国際賞の授賞対象分野は『自然と共生する持続可能な技術社会形成』と『医学・工学の融合における疾患への技術の展開』の2分野で、前者から選ばれたメドウズ博士は『成長の限界』報告を基盤とする持続可能な社会形成への貢献が認められました。また、後者で受賞したクール博士は『核医学的断層画像の父』として知られ、核医学における断層イメージングで多大な貢献を果たしました。

受賞者決定に当たっては、世界各国から推薦を受けた多数の候補者の中から財団に設けられた日本国際賞審査委員会が審査し、2氏が選ばれました。

日本国際賞

「日本国際賞」は、全世界の科学技術者を対象とし、独創的で飛躍的な成果を挙げ、科学技術の進歩に大きく寄与し、もって人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められた人に与えられるものです。

受賞者は、国籍、職業、人種、性別等は問いませんが、生存者に限られます。

この賞の対象は、科学技術の全分野にわたりますが、科学技術の動向等を勘案して、毎年2つの分野を授賞対象分野として指定します。

本賞は、原則として各分野1件、1人に対して授与され、受賞者には、日本国際賞の賞状、賞牌及び賞金5,000万円(1分野に対し)が贈られます。

授賞業績

『成長の限界』報告を基盤とする
持続可能な社会形成への貢献

デニス・メドウズ博士

1942年6月7日生まれ（66歳）

ニューハンプシャー大学システム政策学 名誉教授、インタラクティブラーニング研究所 代表

概 要

私たち人類にとって、かけがえのない存在である地球は、同時に限りある存在です。その地球上で人類が存続していくために実現しなければならない課題が「持続可能な社会」の実現だといえます。そして、今から30年以上も前に、このことを科学的な分析により訴えたのがデニス・メドウズ博士を中心とした研究グループでした。1972年に発表され世界に衝撃を与えた報告書『成長の限界』は、現在でも私たち人類の進む道を照らし続けています。

重みを増す 37 年前の警告

化石資源の枯渇や地球温暖化問題を抱えている現在、人々は、地球はもはや無限の大地ではなく、限りある存在であることを理解しています。そして、持続可能な社会を築くための、国際的な取り組みも始まっています。

今から37年前、世界が第二次世界大戦後の成長期にあるさなか、この問題に警告を発していたのが、当時マサチューセッツ工科大学スローン経営学校の准教授であったデニス・メドウズ博士を中心とする研究チームでした。

メドウズ博士らは、ローマクラブの依頼を受け、「このまま人類が成長を続けていった場合、地球の未来はどうなるのか」について、最新の経済学とシミュレーションモデルを駆使して分析。1972年にローマクラブからその報告書『成長の限界』が発表されました。

「資源・環境・土地などは地球物理容量に一定の制約がある。人口と経済の拡大を放置すれば、人類は危機的な状況に陥る。これを抑制するためには、できるだけ人口と経済のゼロ成長を実現しなければいけない」という報告書のメッセージは、経済活動の拡大を続けてきた世界に大きな衝撃を与えました。現在と比べ、はるかに成長志向の強い時代。報告書への反発も少なからずありました。

しかし、1973年と1978年に2度起こったオイルショック、急ピッチに進んだ世界人口の拡大、地球温暖化問題など、世界はメドウズ博士らが予測したとおりに進んできました。現在の地球環境問題への世界的な取り組みにも、『成長の限界』のメッセージが大きく生かされています。

世界モデルで 100 年後の地球を予測

ローマクラブは、イタリアのオリベッティ社の副社長であったアウレリオ・ペッチェイ博士が、資源、人口、軍拡、環境破壊などの全地球的な問題に対処するため、1968年に発足した国際人の集まりです。過去しばしば研究報告を発表していますが、その第1回がメドウズ博士らによる『成長の限界』でした。

ローマクラブは「人類の危機に関するプロジェクト」を立ち上げ、メドウズ博士に調査研究を依頼。メドウズ博士は、研究主査として故ドネラ夫人や若手研究者とともに研究チームを発足しました。そこで、取り組んだのはシステム・ダイナミクスの手法を用いて、全地球規模の経済活動をコンピュータ・モデル化し、地球の将来を約100年間にわたってシミュレーションするということでした。

報告書では、幾何級数的に増大を続ける5つの要素。つまり、人口、食糧消費、工業化、環境汚染、天然資源消費を重要な要素としていくつかの近未来シナリオを描き出しました。そして、当時のまま成長を続けることは物理的制約により不可能であることを示したのです。特に、工業化による経済成長と世界人口が「正の増幅効果」をもたらし、環境汚染、天然資源の枯渇、飢餓などの負の側面を拡大。やがて世界システムは破局を迎えるというメカニズムは世界の人々に衝撃を与えました。

いわば当時の科学データを総動員して構成した世界モデルを元に描き出した「地球危機レポート」であり、世界がその検証に乗り出しました。日本でも、ローマクラブ東京事務所が開設され、日本研究チームが発足しています。

常に検証を続ける

しかし、世界モデルの検証より早く世界情勢は動き出していたともいえます。報告からわずか1年後の1973年10月、第4次中東戦争の勃発により世界はオイルショックに見舞われました。国内の消費者物価指数で1974年は23%上昇し「狂乱物価」という造語まで生まれました。

そして、同時に浮上したのが地球環境問題です。農地の砂漠化、酸性雨による森林破壊などをきっかけに自然科学分野による地球環境の分析が進み、人類の経済活動が地球温暖化をもたらす可能性が指摘されました。1988年には「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)が設立され、現在に至るまで科学的評価が継続的に行われています。

こうしたなか、メドウズ博士らは『成長の限界』の検証作業にも取り組んできました。20年後の1992年に第2作『限界を超えて生きるための選択』を発表。この間に蓄積されたデータを新たに盛り込み、地球は既に扶養力の限界を超えてしまったことを示しました。ここでもメドウズ博士らは新たに14のシナリオを提示、「持続可能な社会」へと舵を取れと訴えました。そして、2004年に発表されたのが『成長の限界 人類の選択』です。ここでも10年間のデータが新たに付け加えられました。例えば、世界の54カ国で1990年よりGDPが減少していることや、2000年の時点で地球の扶養力を20%オーバーしていることなどが示されました。

この『成長の限界』に基盤をおくメドウズ博士は、37年間終始一貫して持続可能な社会形成への努力を訴え続けており、報告書には、必ず「持続可能な社会」への処方箋が加えられています。『成長の限界』の末尾には「政治家、政策立案者、科学者たちが、人類の未来システムの危機と希望について、国際的に討議を重ねていくことがあれば、人類は希望を失うことはない」と結んでいます。このメッセージこそ、メドウズ博士とローマクラブが残した最大の財産といえるでしょう。

『成長の限界』が切り開いた人類の未来

1965

1968 ローマクラブ設立会合開催

1970 ローマクラブ設立

1972 『成長の限界』発表
国連環境計画(UNEP)設立

1973 第1次オイルショック

1975

1978 第2次オイルショック

1979 長距離越境大気汚染条約調印

1980

1985 「ヘルシンキ議定書」の議決

1988 「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)設立

1990 IPCC第1次評価報告書承認

1992 『限界を超えて 生きるための選択』発表

1992 「環境と開発に関する国際連合会議(リオ・サミット)」開催

1995

1997 「京都議定書」の議決

2000

2002 「持続可能な開発に関する世界首脳会議」開催

2004 『成長の限界 人類の選択』発表

2005

2007 IPCC第4次評価報告書承認

2010

授賞業績

核医学における 断層イメージングに対する貢献

デビット・クール博士

1929年10月27日生まれ（79歳）
ミシガン大学医学部 放射線医学教授

概 要

現在、CT（コンピュータ断層撮影）などさまざまな画像診断装置が医療の現場で活躍しています。デビット・クール博士は、1950年代の後半、放射性同位元素の体内分布を断層撮影する実験を世界に先駆けて行いました。そして、1960年代後半に SPECT（単光子放出断層撮影装置）を開発。ヒトの体の断層写真を得ることに世界で初めて成功しました。この研究は、X線 CT や MRI（磁気共鳴画像法）の開発に大きな影響を与えたほか、近年、がんの早期発見などに威力を発揮している PET（陽電子放出断層撮影）の実現をもたらしました。

世界初の断層撮影に成功

患者の体をメスで傷つけることなく、体の内部を詳しく調べたい……。そんな医学者の夢を最初にかなえたのは、レントゲンによる X 線の発見でした。X 線写真は、現在でも主に骨や肺の病気の診断に広く用いられていますが、こうした画像診断技術に画期的な進歩をもたらしたのは、1960年代後半から 1970年代にかけて、CT（computed tomography；コンピューター断層撮影）の技術が開発されたことでした。体を輪切りにしたような断層イメージング画像が得られるようになり、臓器の状態をより精密に調べることができるようになったのです。

現在、医療の現場では、X 線 CT、MRI（磁気共鳴画像法）、PET（陽電子放出断層撮影）、SPECT（単光子放出断層撮影）など、さまざまな断層イメージング技術が臨床応用されていますが、その先駆けになったのは、デビット・クール博士による SPECT スキャナーの開発でした。SPECT は、外から X 線を照射しその吸収量から断層画像を得る X 線 CT と異なり、体内に投入した微量の放射性薬剤が発するガンマ線をキャッチする診断装置。体内における薬剤の動態を捉えることで、臓器の血流や代謝機能などを明らかにすることができます。

クール博士の SPECT スキャナーは、ヒトの体で断層写真を実現したという点で、実は X 線 CT スキャナーよりも早く、研究はさまざまな画像診断装置の開発に影響を与えました。この業績によりクール博士は、「核医学的断層画像の父」と称されています。

CT などの画像診断の開発を加速

クール博士は、1929年にアメリカ合衆国ミズーリ州東部のセントルイスで生まれました。子供の頃から化学実験に興味を持ち、高校時代にはラジオアイソトープ（放射性同位元素）を用いて行った実験が高く評価されました。その後、博士はテンプル大学の物理学科へ進学しましたが、最終的に研究テーマとして選んだのは放射性物質の医学への応用でした。

クール博士は、1955年にペンシルバニア大学で医学博士号を取得しましたが、このとき核医学はまさに黎明期にありました。1958年、体内に注入した放射性薬剤が発するガンマ線を捉えることで薬剤の体内分布を画像化するシンチレーションカメラが開発され、その臨床応用が始まったのです。しかし、クール博士はこの技術に満足できませんでした。シンチレーションカメラは、体内に三次元に分布する放射性薬剤の二次元投影像を見るもので、体のどこにどれだけの薬剤が存在するか定量的なデータが得られなかったからです。

この問題を解決するために、1962年にクール博士が提案したのが、Emission CT の原理です。これは、体の軸を中心に 360 度方向から得られたガンマ線データをコンピューターで解析することで、体の断層面における薬剤分布図を得るというもの（図参照）。これなら、どの臓器にどれくらいの放射線薬剤が分布するかが定量的に分かります。なお、CT では、このときコンピューターが行っているのは巨大な行列演算です。1 つの断面を格子状に分割し、各部位の放射線量を未知数とし、その合計が実際の放射線量と等しくなるように連立方程式を解くのです。

そして、1964年には単光子放出断層撮影装置である

SPECT (single photon emission computed tomography) スキャナーシリーズのマークIIを開発。この装置によりヒトの体の断層写真を世界で初めて撮影することに成功しました。これは、1972年にゴッドフリー・ハウズフィールドがX線CT装置を開発するより、かなり早かったといえます。

身体機能を見る装置として進化

クール博士は1970年にSPECTスキャナーのマークIII、1976年にマークIVを開発、核医学の新たな可能性を切り開いていきました。その後、X線CTは、臓器そのものの形態を精密に見るという方向に進歩しましたが、それに対して、SPECTは血流、代謝、神経伝達機能など、体の機能を見る装置として発達し、現在でも医療の現場で活躍しています。

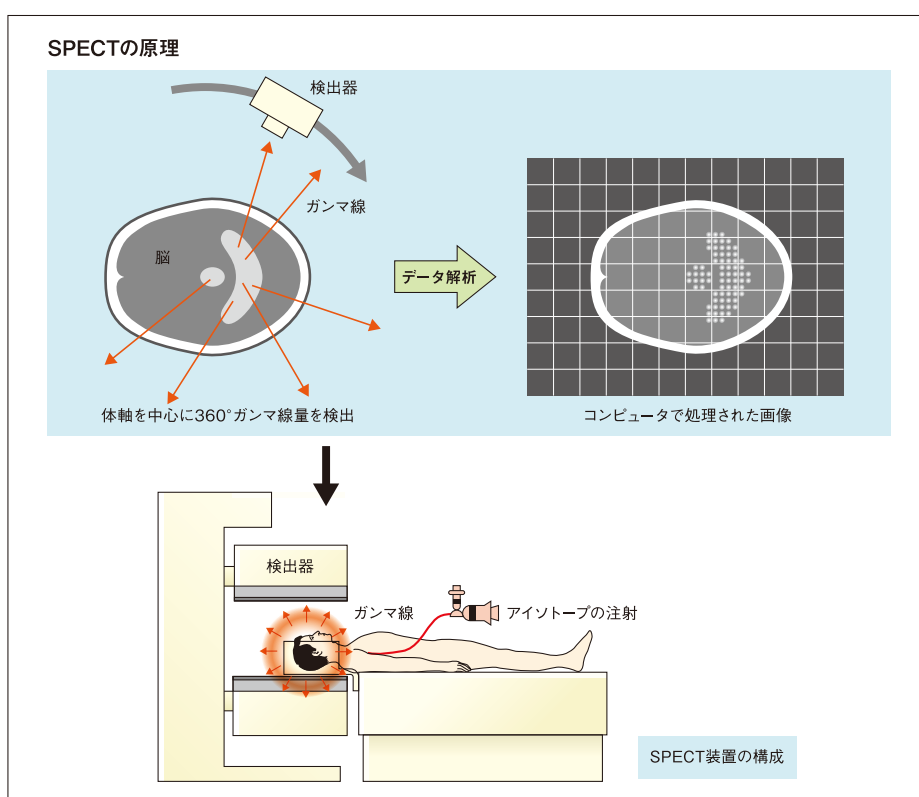
そして、クール博士らが同時に取り組んだのがPETの実用化です。生命活動を支えるエネルギー源であるブドウ糖の代謝を捉えることで、さまざまな生体機能のイメージングが可能になります。ただ、ブドウ糖に放射線を放出させるためには、当時一般的に使われていたラジオアイソトープではなく、陽電子 (positron) で標識することが必要でした。そのため、SPECTとは別にPET(陽電子放出断層撮影)と呼ばれているのです。

きっかけとなったのは、動物で脳の研究をしていた

米国立精神衛生研究所のソコロフ博士が、ブドウ糖の一種である2-デオキシグルコースを陽電子放出物質(核種)であるC-14で標識、その組織の濃度分布を密着フィルム画像で表すことに成功したことでした。この成果を受け、クール博士のグループは、ソコロフ博士、ブルックハイヴン国立研究所のウォルフ博士と共同研究を開始。ヒトに利用できる陽電子放射としてF-18を標識したFDG(18F-2-Deoxy-2-fluoro-D-glucose)が最適であると結論づけました。そして、1976年8月、ブルックハイヴン国立研究所で合成されたFDGが、ペンシルバニア大学に運ばれ、SPECTスキャナー・マークIVを応用することで、はじめてヒト脳の代謝イメージングに成功しました。

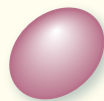
最近、FDGを用いたPETスキャナーの開発が急速に進んでいます。特に、がん組織では正常組織と比較してブドウ糖代謝が高まることから、がんの早期発見に威力を発揮しています。同時に、画像融合技術が進み、PETとX線CTを組み合わせたPET-CTが、がんや脳神経疾患の診断・治療などに重要な役割を果たしています。

このように医療の進歩に大きく貢献している画像診断の技術研究の最先端では、さまざまな分子プローブの開発が行われ、生体内の分子の挙動を明らかにする分子イメージングが実現しています。医学の発展に寄与するばかりでなく、生命のナゾを解く技術として、一層の発展が期待されています。



2009年(第25回)日本国際賞審査委員会委員

領域Ⅰ 自然と共生する持続可能な技術社会形成



委員長
熊谷 信昭
兵庫県立大学長
大阪大学
元総長・名誉教授



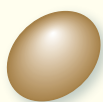
部会長
茅 陽一
(財)地球環境産業技術研究機構
副理事長



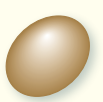
部会長代理
安井 至
(独)科学技術振興機構
研究開発戦略センター
上席フェロー

- 委員 植田 和弘 京都大学大学院経済学研究科 教授
- 委員 武内 和彦 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
- 委員 中村 桂子 J-T生命誌研究館 館長
- 委員 鷲谷 いづみ 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

領域Ⅱ 医学・工学の融合における疾患への技術の展開



部会長
金澤 一郎
日本学術会議 会長



部会長代理
梶谷 文彦
川崎医療福祉大学 副学長

- 委員 小林 英司 自治医科大学 教授
- 委員 辻本 豪三 京都大学大学院薬学研究科 教授
- 委員 鄭 雄一 東京大学大学院工学系研究科 教授
- 委員 永井 良三 東京大学大学院医学系研究科 教授
- 委員 八木 哲也 大阪大学大学院工学研究科 教授

2010年(第26回)日本国際賞授賞対象分野

2010年(第26回)日本国際賞(Japan Prize)授賞対象分野と概念定義を、次のとおり決定いたしました。

領域Ⅰ(数学系、物理学系、化学系、工学系) 授賞対象分野:「工業生産・生産技術」

背景、選択理由

産業革命以来、科学技術の飛躍的な発展によって人々の生活水準は著しく向上し、人類史上未曾有の豊かな社会が実現しました。しかし、地球上には、この繁栄から取り残された人々がまだ数多くいます。一方で、科学技術を進めるにも、地球環境への配慮が欠かせなくなってきました。そのような視点を踏まえて、人類の真の繁栄のために、なお一層の生産技術の革新が必要とされています。

対象とする業績

2010年の日本国際賞は、工業生産・生産技術の分野において、飛躍的な科学技術の進展をもたらし、新しい製品や産業の創造、生産性の向上などを通じて、生活の利便性や安全性の向上、貧困の克服に寄与するなど、社会に大きく貢献する業績を対象とします。

領域Ⅱ(生物学系、農学系、医学系) 授賞対象分野:「生物生産・生命環境」

背景、選択理由

人類の生存は、過去もそして将来も、地球上の生物資源をさまざまな形で利用することなしにありえません。しかし、その生物資源を育む地球の環境は急速に劣化しつつあります。一方、技術革新によって食糧生産は飛躍的に増大しましたが、人口はそれをも超えて爆発的に増えようとしています。環境を守り、生物の多様性を確保するとともに、持続可能な環境保全型の生産が必要とされています。

対象とする業績

2010年の日本国際賞は、生物生産・生命環境の分野において、飛躍的な科学技術の進展をもたらし、食糧生産の飛躍的増加や生産性向上などを通じて生活の向上や貧困の克服に寄与したり、あるいは、生物多様性の維持や快適な生命環境の実現に寄与するなど、社会に大きく貢献する業績を対象とします。

2010年(第26回)日本国際賞分野検討委員会委員



委員長
矢崎 義雄
(独)国立病院機構
理事長



副委員長
白井 克彦
早稲田大学 総長

- 委員 大隅 典子 東北大学大学院医学系研究科 教授
- 委員 笠木 伸英 東京大学大学院工学系研究科 教授
- 委員 荻田 吉夫 宮内庁 元式部官長
- 委員 木村 孟 (独)大学評価・学位授与機構長
- 委員 桑原 洋 (株)日立製作所 特別顧問
- 委員 小宮山 宏 東京大学 総長

- 委員 柴崎 正勝 東京大学大学院薬学系研究科 教授
- 委員 辻 篤子 朝日新聞社 論説委員
- 委員 橋本 和仁 東京大学大学院工学系研究科 教授
- 委員 林 良博 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
- 委員 宮原 秀夫 (独)情報通信研究機構 理事長
- 委員 森 健一 東京理科大学大学院総合科学技術経営研究科 教授

2009年 研究助成



2009年 研究助成金 贈呈式

日本国際賞の授賞対象と同じ分野で研究する35歳未満の若手科学者を対象に、独創的で発展性のある研究に対し助成(100万円/件)を行なっています。将来を嘱望される若手科学者の研究活動を支援・奨励することにより、科学と技術の更なる進歩とともに、それによって人類の平和と繁栄がもたらされることを期待しています。

本年は1分野10件、計20件の募集を行いました。選考委員会による厳正なる選考の結果、次の20名の方々が受領者として決定しました。

領域Ⅰ 自然と共生する持続可能な技術社会形成

- 片柳 薫子** (独)国際農林水産業研究センター 特別派遣研究員
プロセスベースモデルを用いた水田の乾湿繰返し灌漑による温室効果ガス排出量削減効果の評価とその広域への適用
- 小西 孝史** 新潟大学災害復興科学センター 特任助教
歩行者用道路ネットワークにおけるノード・パス情報推定に関する研究
- 佐藤 太裕** 北海道大学大学院工学研究科 助教
水中浮遊式トンネル構造体の構造挙動を積極活用した地球に優しい次世代型洋上施設の提案
- 高瀬 雅祥** 首都大学東京大学院理工学研究科 助教
有機太陽電池を指向した星形ドナー・アクセプターπシステムの開発
- 津留 美紀子** (独)海洋研究開発機構極限環境生物圏研究センター 技術研究副主事
ナノ構造材料を用いた、深海微生物独自のバイオマス活用能力の開拓とその利用
- 寺坂 和祥** 名古屋市立大学大学院薬学研究科 助教
環境低負荷型パルプ原料植物への新しいアプローチ～植物配糖化酵素を用いた低リグニン含量植物の創出～
- 長野 方星** 名古屋大学大学院工学研究科 講師
自然循環型ループヒートパイプの内部熱流動特性の研究
- 平山 朋子** 同志社大学理工学部エネルギー機械工学科 准教授
中性子反射率法による潤滑摩擦面の吸着層解析とそのトライボロジー特性の把握
- 村岡 貴子** 群馬大学大学院工学研究科 助教
廃棄物を低減化した触媒的β-ケトエステル合成法の開発
- 矢原 耕史** 久留米大学大学院医学研究科 大学院生
微生物と遺伝子の環境中での拡散を制御するための疫学的・数理生態学的解析

領域Ⅱ 医学・工学の融合における疾患への技術の展開

- 浅井 大輔** 聖マリアンナ医科大学医学部 助教
疾患細胞選択的な遺伝子発現制御技術の創出と治療への応用
- 梅津 信二郎** (独)理化学研究所基幹研究所 基礎科学特別研究員
静電インクジェット現象を利用した三次元細胞組織の作製
- 大石 基** 筑波大学大学院数理物質科学研究所 講師
医工学連携によるガンのピンポイント診断・治療を目指したナノデバイスの創製
- 大久保 寛** 首都大学東京システムデザイン学部システムデザイン学科 助教
Constrained Interpolation Profile(CIP)法を用いた非線形伝搬シミュレーションと超音波画像処理への応用
- 金 美海** 大阪大学大学院基礎工学研究科 JSPS外国人特別研究員
多分化能を有するヒト幹細胞の分化制御を目指した培養面の開発
- 小泉 憲裕** 東京大学大学院工学系研究科 講師
非侵襲超音波診断・治療統合システムの構築法に関する研究
- 坂元 尚哉** 東北大学大学院工学研究科 助教
工学的アプローチによる血流力学環境下における血管壁リモデリング制御機構の解明
- 重永 章** 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部(薬学系) 助教
ペプチド化学を基盤とした神経変性疾患治療へのアプローチ
- 原 雄介** 早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構 講師
高速応答・高耐久性を有する新規ドラッグデリバリーシステムの構築とその実用化検討
- 二井 信行** 東京電機大学フロンティア共同研究センター 助教
マイクロ・ナノ流体を利用した、ラボの外で展開できる細胞培養・アッセイシステム

2010年研究助成に申請ご希望の方はホームページ(www.japanprize.jp)の応募要項をご覧ください。(2009年3月にお知らせ予定)

2009年 研究助成選考委員会

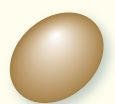
領域Ⅰ 自然と共生する持続可能な技術社会形成



部会長
大垣 眞一郎
東京大学大学院
工学系研究科 教授

- 委員 石川 幹子
東京大学大学院工学系研究科 教授
- 委員 柏 雅之
早稲田大学人間科学学術院 教授
- 委員 千賀 裕太郎
東京農工大学大学院共生科学技術研究院 教授
- 委員 田中 宏明
京都大学大学院工学研究科 教授
- 委員 藤江 幸一
横浜国立大学大学院環境情報研究院 教授

領域Ⅱ 医学・工学の融合における疾患への技術の展開



部会長
桐野 高明
国立国際医療センター
総長

- 委員 倉智 嘉久
大阪大学大学院医学系研究科 教授
- 委員 佐久間 一郎
東京大学大学院工学系研究科 教授
- 委員 高戸 毅
東京大学大学院医学系研究科 教授
- 委員 田畑 泰彦
京都大学再生医科学研究所 教授
- 委員 山口 隆美
東北大学大学院工学研究科 教授

2009年やさしい科学技術セミナー

本セミナーは、私たちの生活に関りのある、様々な分野の科学や技術について、その分野の専門家にやさしく解説していただきます。講演ばかりでなく実験室の見学なども行われ学生から一般の方々を対象に年10回各地で開催しています。

回数	開催日時	場所(定員)	テーマ	講師
189	1月28日(水) 18:00-19:30	泉ガーデンタワー7階 (144)	すまいと健康のカビ対策	李 憲俊 先生(衛生微生物研究センター 所長)
190	2月26日(木) 18:00-19:30	泉ガーデンタワー7階 (144)	磁性流体の不思議な世界	山口 博司 先生 (同志社大学理工学部機械システム工学科・工学研究科 教授) (エネルギー変換研究センター 所長)

お申し込み方法

ホームページ(www.japanprize.jp)から、またはFAX・お葉書にて希望される講演月を明記の上、住所、氏名、年齢、電話(FAX)番号を記入し、当財団までお申し込みください。(参加費は無料です)
応募者多数の場合に限り、抽選とさせていただきます。結果は発送をもって代えさせていただきます。

開催場所

泉ガーデンタワー7階「カンファレンスルーム」 東京都港区六本木1-6-1

ストックホルム国際青年科学セミナーへ学生派遣 ノーベル賞行事にも参加

当財団ではスウェーデン青年科学者連盟が主催し、ノーベル財団が後援するストックホルム国際青年科学セミナー(Stockholm International Youth Science Seminar, SIYSS)に日本から唯一学生を派遣しています。

2008年12月は神戸大学の松下麻衣さんとテキサス大学の萬井知康さんが参加しました。

以下はお二人のレポートです。

日本人によるノーベル賞受賞が相次いだ2008年12月、私たちは幸運にも国際科学技術財団からの派遣でノーベル賞授賞式関連行事と同時に開催されたストックホルム国際青年科学セミナーに出席することができました。そこでは、受賞者と身近に接する機会を得、直に科学に対する熱き思いやパイオニアとなるための研究者の心得を学ぶことができました。

自然科学分野の受賞者からのお話の中で共通していたのは、大きな流れの中でも既存の理論に固執せずに、新たな、そして大胆な見方を取り入れていくことによって科学技術の大きな飛躍となる成果に繋がっていったということでした。

また、分野以外の研究にも常に視野を広げる柔軟さや、いち早く情報を入手し吸収していく力が科学界のパイオニアへの第一歩であると強調されていたことが印象的でした。

そして、自分の仮説に忠実であること、定めた目標を目指して突き進む姿勢を忘れないこと、良き指導者や共同研究者との出会いがより良い成果に結び付くとの助言をいただき心に深く刻みました。

私たちはこのような科学者として貴重な体験をする機会を与えていただいた国際科学技術財団の皆様に感謝すると同時に、この経験を糧としてこれからも研究活動に邁進していくと、決意を新たにしました。



ノーベル賞授賞式直前



2002年医学生理学賞受賞者Horvitz教授と松下麻衣さん(右)、萬井知康さん(左)



2008年物理学賞受賞者益川教授、小林教授



SIYSSでの講演